第一回

清兵衛日記の概要

ここに江戸時代末期の京都に住む商人の日記がある。この史料から当時の人々の生活の一端を見てみようと思う。京都に住む町人が、どんな食べものを食べていたか、どんな思いで生きていたのか、食材に地域性は見られるか、時代の流れによる変化はあるのかなど、興味は尽きない。この日記には日常の食のほかに、様々な年中行事や通過儀礼の食の記述がある。これらの行事食に視点を当て、数回に分けて当時の暮らしや食について探ってみようと思う。

史料の期間および形態

この日記は全部で二三冊あるが、私的な日記は一六冊で、残りの七冊は『町用萬事諸控帳』などの公的な記録である。幕末から明治にかけて三八年間に書かれたもので、天保九（一八三八）年～明治九（一八七六）年までの不連続で飛び飛びの記録である。それぞれ一年分一冊に綴じられている。

今回取り扱う日記の期間は私的な日記の一六年間の中から、嘉永から明治までの七年分七冊、それは嘉永五年、安政四、五、六年、文久三年、慶応元、四年の一八五二～一八六八年分に限ることにしたい。

史料の形態は表、裏表紙とも厚紙の縦長帳で、中は半紙半折綴じ、縦一三cm、横三四cm。表の表紙は毛筆で『日並帳』右端に年号、裏表紙は筆者の名字が記してある。（写真１）

写 真 1 ． 史 料 の 外 観 と 状 態

史料の筆者

筆者は八木清兵衛（以後清兵衛と称し、日記を清兵衛日記と記す）名字帯刀を許された商人である。生まれたのは文政七（一八二四）年で、住所は京都五条橋通烏丸西入醍醐町、居宅の大きさは表口二間半、裏行は一二間二尺九寸。他に土蔵と借家を持っている。

清兵衛の生業

生業は呉服商で、仲買と小売りを営んでいる。本家は水口屋庄兵衛と称す。水口屋は屋号で清兵衛は水口屋の別家で、暖簾中の筆頭別家ともいうべき暖簾のまとめ役である。のちに醍醐町年寄役に推挙されている。

清兵衛の家族構成（同居人を含む）

家族は妻と子ども三人で、長女は筆者が二八歳の嘉永四（一八五一）年に誕生し、長男は安政四（一八五七）年、次男は文久三（一八六三）年に生まれた。同居している者は年によって異なるが、乳母（子どもがそれぞれ小さい時に）と奉公人が男女合わせて六～七人である。

清兵衛の日常と活動

商家の主人であるので、その務めと町御用などの行政に関わるものから、親類のつきあい、商売仲間、趣味仲間との関わりなど幅広い。趣味娯楽は、芝居、狂言の見物、茶道、謡曲、能の習い事など歳を経るに従い、徐々に増えている。

清兵衛日記には物見遊山の記述も多い。例えば花見では梅、桜のほかに杜若（かきつばた）

萩、菊などと紅葉狩りもある。また松茸狩り、鮎獲りや船遊びというのもみえる。鴛（おしどり）を見にいくというのもあった。自然を、花を愛でる心はあったと思われるが、大いに気分転換したことだろう。清兵衛は商家の主人同士で出かけるだけでなく、使用人を含めた家族で出かける事もあった。

生活リズムとしての年中行事

年中行事は毎日の生活にリズムを作る。年中行事を行う日については「節」という語が使われる。「節」は竹の「節目（ふしめ）」であり、時間や空間にメリハリをつける。

江戸時代、幕府が定めた五節句は中国伝来の重日の考えを取り入れたもので、吉の数字の七五三が中心に構成されている。五節句は一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日である。いずれも日本では水辺の行事として、穢れを祓え清めるという行為が伴っている。神霊を招いてお供えするので節句は「節供」でもある。

日本の公的な暦である官暦は中国伝来のものであるが、これに対して、民間歴の民歴が存在する。それは満月の夜すなわち、一五日を中心とする考え方である。小正月の一五日も民間歴に基づくものである。また女たちの月待ち行事は妊娠や安産を祈願するもので一九夜待ちや二十三夜待ちとして伝統的な形態も民歴に基づくものである。民歴は農山漁村に定着しているものであるが、都市に住む町人にも定着していたようだ。いずれにしても官歴、民歴の行事は時代の流れによって変化していることが推察できる。

【参考文献】

・小川直之『日本の歳時伝承』角川書店　平成三〇年
・宮田登『正月とハレの日の民俗学』大和書房　一九九七年